

震災後に生まれた市民ネットワークの新たな展開

阪神・淡路大震災では、倒壊しそうな建物を樹木が支え、火災が広がるのを公園や街路樹が防ぎました。被災直後の復旧時には、公園が貴重な避難場所となりました。また、復興時には、公園や仮設住宅まわりの空地（オープンスペース）での花づくりやコミュニケーションが人をつなげ、新たな生活を支えたこともあります。これらのことから緑のあるオープンスペースの機能が見直され、現在の花と緑のまちづくりにつながっています。



図 1

アーキテクトは「建築家」のことで、建物を設計する職能です。オープンスペースや緑を設計するのはランドスケープ・アーキテクトといい、これは「造園家」のことで、風景をデザインする職能です。阪神・淡路大震災からの復旧・復興にも貢献したランドスケープ・アーキテクトは、単にオープンスペースの形を決めるだけでなく、その場所の楽しみ方、その場所での生活まで考えます。時として、オープンスペースの形はほとんど変わらなくとも、楽しみ方や生活だけを提案することもあります。オープンスペースと人間とをつなげることや、その場所で人間と人間をつなげることが大切なのです。



図 2

今回の企画展「震災を超えて」では、震災から10年が経過した都市部でのまちづくりについて、ランドスケープ・アーキテクトの視点から「ネットワーク」（つなげること）をキーワードに2つのモデルを提案しています。

【提案1:多発的活性化プログラムの連携・循環によるまちづくりの展開】

1つ目の提案は、神戸の新在家地区を例にした、3年で地域ネットワークが形成されるまちづくりモデル



図 3

です。1年目は楽しむ時期で、路地裏ガーデニング大会のような啓発イベント(図1)によって人材の発掘やグループの結成を行います。イベントと平行して地元での組織づくりも行い、住民の皆さんが楽しみながら外部へ情報発信していきます。2年目には、地元企業や教育機関等のグループと活動連携を行います。コミュニティ・ガーデンを行っているグループと酒粕の活用を考えているグループが合同で堆肥づくりイベントを行うなど(図2)、色々なまちづくりグループ間のネットワークも始まります。さらに3年目になると、「酒蔵のみちを考えるプロジェクトグループ」など、地域像の構築に向けての活動(図3)も始まり、また定例交流イベントが地域像の構築と共有を目的として開催されます。このように小さなまちづくりを連携させれば、住民の皆さんの手によってまちが良くなっていく充実感も味わえ、まちへの愛着が増すでしょう。

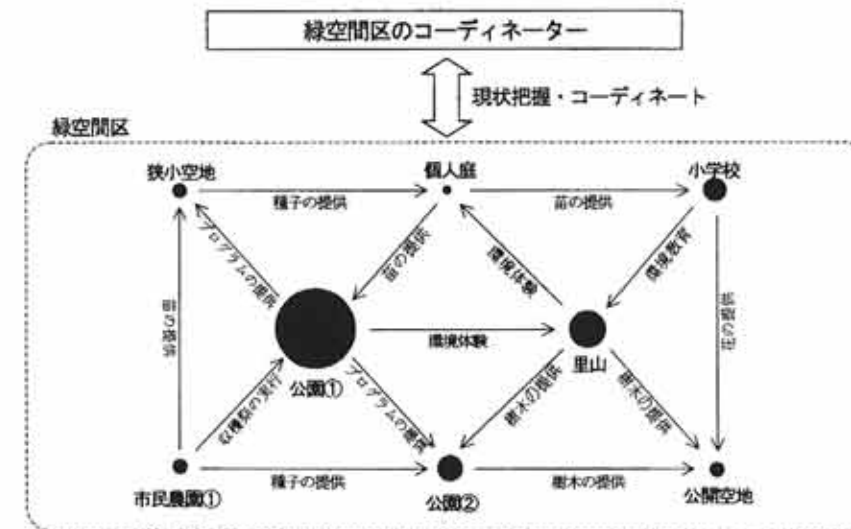


図 4

【提案2:緑空間区とコーディネーター】

震災後にできた小さな空き地が、まだ都市部に多く残っています。花づくりの場やこども広場として活用しているところもありますが、どうしても一時的なものが多くなります。2つ目の提案は、場所が離れた狭い空き地をコーディネーターがつなぎ、ひとつの緑空間区の広がりとして活用するというものです。図4はその関係を表しています。公園で育てた苗で狭小な空き地の緑化を行ったり、小学校の環境教育のフィールドとして里山を活用したりといったネットワークが考えられるでしょう。こういうネットワークを担う人材:コーディネーターがいると、狭い空き地全てがひとつの「緑空間区」としての存在意義を持つようになります。ひとつの場所や活動にとらわれず、色々なつながり:ネットワークを考えるコーディネーターが、これからのまちづくりに必要なのです。

(自然・環境マネジメント研究部 嶽山洋志・赤澤宏樹)